



No.30 2005.12.

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目 次			
巻頭言	創刊 10 周年を迎えた「土木史フォーラム」と今後	五十畑 弘	1
フォーラム	土木史が教えてくれたこと	永田 礼子	2
土木史ニュース	平成 17 年度選奨土木遺産		3
文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覧	北河大次郎 阿部貴弘	4
地域のニュース	大阪府立狭山池博物館平成 17 年度特別展 近代滔々―琵琶湖・淀川・狭山池―を終えて	有井 宏子	5
	夕張炭鉱遺産サミット報告	岡田 昌彰	5
海外土木史	エッフェル橋の発見 : バトナム・ホーチミン市のモン橋 + α	伊東 孝	6
学会の動き	第 26 回土木史研究発表会「講演用論文及び討議欄の募集」		7
	第 32 回土木計画学研究発表会（秋大会）報告	田中 尚人	7
	第 1 回景観デザイン研究発表会報告	田中 尚人	7
お知らせ	I.K. プルネル生誕 200 年記念コンファレンス		8
	餘部鉄橋架け替えについて	佐々木 葉	8
土木史関係図書		横松 宗治	8

巻 頭 言

創刊 10 周年を迎えた「土木史フォーラム」と今後

土木史フォーラム小委員会委員長 五十畑 弘（日本大学）



土木史フォーラムの創刊は1995年11月のことで、本号はちょうど10年目となります。今回からは、年2回のフォーラムの発行となりますが、あわせてウェブ版のニュースレターも発行してゆくことと致します。

10年前の土木史フォーラムの創刊に至るまでは、「土木史学」という用語も使われて土木史研究のあり方に関し、いろいろの議論がありましたことが思い起こされます。土木史研究は、入り口の広さの一方では、奥の深さと取り組みの難しさもよく指摘されるところではあります。このため先輩の土木史研究者の中には、初学者の安易な取り組みを戒める声も一部にはありました。しかし、土木史研究を広く発展させるためには、研究の専門家だけではなく、他の専門分野の研究や業務の傍ら参加してきた研究者、愛好者、初めて土木史研究を志す人たちが、積極的に土木史研究に関わる必要があるのではないかと

の考え方もあり、この土木史フォーラムの創刊に繋がりました。すなわち創刊の趣旨は、土木史フォーラムを幅広い土木史研究の関係者に交流の場を提供しようというものでありました。

土木の社会に対する役割が変質しつつある今日において、専門分野、年齢など広範な参加者によって土木史研究を盛んにしてゆく意味はますます高まっています。10年目の節目にあたり、創刊の趣旨を改めて確認し、今後さらに、幅広い関係者の交流の場として、土木史研究の活性化の一助となればとの方針で誌面を充実させて参りたいと考えております。

土木史研究を始めて間もない人、若手研究者、学生の皆さんからも積極的に話題を提供して頂ければと思います。土木史フォーラムが、土木学会会員、土木専門分野以外の人たちへの働きかけや、研究者予備軍へのアドバイスにつながっていくことを期待しております。

土木史が教えてくれたこと

早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士二年 永田 礼子

10月25日。この日、初雪になろうかとも予報された寒い朝、旭橋はその荘厳かつ雄大な姿を石狩川の水面に映してみせた。感動がこみあげる。通勤・通学の人を乗せた車輛や歩行者が絶え間なく橋を渡っていく。人々の生活を支えるその姿は周囲の景観に溶け込み、まさに旭川のシンボルだ。

私は現在、修士研究として歴史的な土木構造物をどう延命していくかをテーマに、その維持・保存のために施されるべき補修・補強方法のあり方を探っている。そのため全国の歴史的鋼橋の保存事例について保存に至った経緯、補修・補強工事の内容、外観の変化や特徴を調査している。今回は、旭橋の調査のため北海道までやって来た。

私がこのテーマに取り組むことになったきっかけの一つに余部橋梁の架替えの決定があった。正直に言うと、私がこの橋の存在について知ったのは架替えの議論が起きてからだった。ただ100年近くもの間、地域の生活を支え続け住民の誇りともなっているその橋が、出会ったのと同時に姿を消していくことにやるせなさを感じた。歴史的土木遺産が文化を育み、街の魅力に貢献してきたことは紛れもない事実である。今後、それを適正に評価し、残すか捨てるかの選択が必要となるだろう。残すという答えに至った時、我々はいかにしてそれらの魅力を後世に伝えることができるだろうか。こうした問題意識から、私は土木史の世界に足を踏み入れることとなった。

「なぜ土木の道に？」とはよく聞かれる質問だ。女の子が何故、とも。しかし、どうして土木を学ぼうと思ったかについて、実は最近まで考えたことはなかった。自分にとっては至って自然な流れだったのだ。小さい頃から大規模構造物への憧れがあった。そしてものづくりに強く魅かれた。人々の生活を支え、社会の基盤をなすインフラを造り、地図に残る仕事したいと就職先にゼネコンを選んだ。

しかし、ものを造るだけの時代はもう終わった。これからの時代、どうやって既存の構造物を保全していくかも建設業に携わる者にとって、重要な課題だろう。「建設にたずさわる者こそ、夢を見、未来を語り、文化を育む。建設とは本来そういう行為であるはずだ。」これはある建設会社の経営者の言葉である。未来を語るためには、まず過去を知ることが必要だと私は思う。

前述の旭橋だが、北海道土木遺産登録をきっかけとして現在、補修計画のための大規模な調査を実施中である。補修に関して、根幹に関わることは決してしない方針だと旭川開発建設部道路第二課小泉課長は話す。地域のシンボルとして価値を認め、姿を変えずに残すことが大前提であると。調査は途中段階だが、大きな欠陥は見つかっていない。改めて先人の偉業に驚かされる。

歴史的土木遺産—そこには想いがある。先人たちが見た夢。そこに注がれたエネルギーを感じることができる。守るべきものがある。現代を生きる自分達の使命を旭橋は教えてくれた。そして私は再び研究の出発点に立った。

土木史とは人間史である。そこに生きた人間達の戦いの跡である。そこから学ぶべきことは多大にある。100年も前の人が何を考えて、どれだけの苦勞を重ねてそれを成し遂げたか。過去を知ることとは今を知ること、そして未来を語ることに繋がっていく。

保存の議論は難しい。何もかも残せばよいというものでもない。我々が守り抜いていくべきものは何なのか。一つだけ確かなことがある。研究を通して、私は多くの素晴らしい構造物と出会った。そして保存に非常な力を尽くした素晴らしいエンジニア達とも出会うことができた。彼らが答えのない世界で、しかし決して諦めることなく戦った跡は人の心を、少なからず私の心を動かす力をもっていた。

先人が夢を見、つくり上げた構造物に込められた思いを汲み取って、現代の技術をもって後世に活かしていくこと—これは自分にとって使命であり、さらに夢となった。土木史は私に、未来を夢見る力を与えてくれたのである。



旭橋（北海道旭川市）

土木史ニュース

平成 17 年度選奨土木遺産

NO	対象構造物	認定書に記載する趣意文	支部	所在地	竣工年
1	雨竜発電所	わが国初の地下式発電所で、その巧みな発電計画により北海道の電力供給の中核を担っている昭和初期を代表する電力土木構造物。	北海道	北海道／ 風連町 幌加内町	昭和18年
2	宗谷線剣淵・士別間 鉄道防雪林	過湿泥炭地に土壌改良法を取り入れた鉄道防雪林植栽技術を確立し、宗谷線のみならずその後の道内各路線の安定輸送に寄与した。	北海道	北海道／ 剣淵町	昭和17年
3	チキウ岬灯台	設置以来大きな改築なく現在まで併用されており、沿岸航行の安全に寄与してきた、地域的愛着の高い灯台。	北海道	北海道／ 室蘭市	大正9年
4	尾去沢鉱山施設群	現存最大級の選鉱場やシッケナーのほか、煙道、煙突、煉瓦発電所など、わが国発展の基礎となった鉱山を一体として伝える遺構。	東北	秋田県／ 鹿角市	昭和18年
5	箱根地区国道1号施設群 —旭橋 —千歳橋 —函嶺洞門	当時としては珍しいRCシェルターで、王宮をイメージした洞門とアーチの美しい2つのRCタイドアーチ橋。旭橋は国内最大スパン。	関東	神奈川県／ 箱根町	昭和8年 昭和8年 昭和6年
6	宇都宮市水道施設群 —戸祭配水場 —第六号接合井 —今市浄水場	北関東最大の宇都宮市の水需要を支え、創設期の雰囲気伝える。地元特産の大谷石を用い、日光街道杉並木を背景とするなど地域性に優れる。	関東	栃木県／ 宇都宮市 今市市 今市市	大正5年 大正5年 大正5年
7	めがね橋 倉松落大口逆除	現在、道路橋に利用されているが、県内最古の煉瓦造り樋門の一つである。4連のアーチ構造は、優れた施工技術により美しい原形と強度を保持している。	関東	埼玉県／ 春日部市	明治24年
8	めがね橋	三連の石積み上路アーチ橋は関東ではこの橋だけであり、竣工当時の規模・形式がよく維持保存されている。	関東	千葉県／ 白浜町	明治21年
9	旧大日影トンネル・旧深沢トンネル	中央本線の開通時に建造された煉瓦造の鉄道隧道群。ぶどうとワインの輸送に寄与し、勝沼ぶどう郷の発展を支えた。	関東	山梨県／ 勝沼町	明治35年
10	稲生港石積防波堤	天端に繁船石が並び、地元産の幡豆石で築造された姿が美しい、大正期の石積み防波堤。	中部	愛知県／ 蒲都市	大正9年
11	安倍川橋	ユニークな球形飾りのある橋門を持つなど、優美な姿を今日に残している大正期における最大級のトラス橋。	中部	静岡県／ 静岡市	大正12年
12	木曽川・揖斐川導流堤	明治より現在まで木曽川、揖斐川河口部の河道を維持して、水害から地域を守り続ける導流堤。	中部	三重県／ 桑名市	明治23年 明治42年
13	御堂筋	第一次都市計画事業で造られた大阪の都市軸である御堂筋は、道路インフラ整備の優れたプロトタイプとして位置づけられる。	関西	大阪府／ 大阪市	昭和12年
14	御坂サイフォン	イギリス人パーマー氏設計による日本初のサイフォン橋で、明治24年以来現在も淡河川疎水の一部として東播磨台地を潤している。	関西	兵庫県／ 三木市	明治24年
15	東山トンネル・新逢坂山トンネル	大正10年に両トンネルを経由する大津～京都間の新ルートが完成し、勾配緩和、曲線改良により、輸送力と速度の向上に貢献した。	関西	京都府／ 京都市 滋賀県／ 大津市	大正10年
16	福浦隧道（初代、二代目）	明治期に隠岐の島町北西に掘られた二つの素掘り式隧道は、自然景観のあった国内最古級の近代土木遺産。	中国	島根県／ 隠岐の島町	明治初年 明治31年
17	旧大浜埼船舶通航潮流信号所	木造の信号所として全国でただ一つしか残っていない古い海洋施設。周辺には当時の船舶通航の安全確保のための情報発信の様子が伺える。	中国	広島県／ 因島市	明治43年
18	大宮橋	開腹式の優美なデザインのアーチ橋である。リズムカルに配置された支柱間もアーチとし、ディテールも非常に美しい。	四国	愛媛県／ 西条市	昭和2年
19	明治橋	明治橋は明治35年に架設された日本最古の合成床版を有した鋼橋である。腐食の進行により、すみやかに土木遺産として推奨されるべきである。	西部	大分県／ 臼杵市	明治35年
20	大田発電所	石造建造物（切妻屋根、六角塔、モルタル吹きつけ）。妻側に島津のくつわ紋。六角塔が接続する特異な構成。	西部	鹿児島県／ 伊集院町	明治41年

文化財となった土木関連建造物等一覧

【重要文化財】追加指定 4 月答申分)

所在地	名称 年代]	特徴
岐阜県 八百津町	旧八百津発電所施設水槽 明治 44]	発電所本館（重文）とともに、わが国で最初期の大規模水路式発電所施設の構成を今に伝える貴重な施設。

【重要文化財】10 月答申分)

所在地	名称 年代	特徴	
山梨県 大月市・ 上野原市	ハツ沢発電所 施設	取水堰堤、取水口制水門、取水口沈砂池、第一号隧道、第一号開渠、第二号隧道、第一号水路橋、第三号隧道、第二号水路橋、第四号隧道、第三号水路橋、第五号隧道、第四号水路橋、第六・七・八・九・一〇及び一一号隧道、第一二・一三・一四・一五・一六・一七及び一八号隧道、水槽、水槽余水路 明治 45] 大野調整池堰堤、大野調整池制水門、大野調整池余水路 大正 3]	桂川にほぼ平行して東西約 14km に延びる水路式発電所施設で、わが国の重要文化財のなかで最大規模となる。 東京電燈株式会社が第二水力電気事業の一環として建設したもので、明治 43 年に着工、大正 3 年の大野調整池の完成をもって全体が竣工した。取水口の沈砂池や隧道は、土砂流入防止等を意図して長大な規模で築かれ、第一号水路橋は大支間を実現した初期鉄筋コンクリート造橋梁であり、大野調整池堰堤は大正期を代表する大規模土堰堤の一つである。 大規模調整池を有するわが国最初期の本格的な水力発電所施設であるばかりでなく、類型の異なる複数の構造物に高度な建設技術が発揮されており、土木技術史上、高い価値がある。

【登録有形文化財】6 月答申分)

所在地	名称 年代]	特徴
山形県 天童市	正法寺川北沢第十六号石堰堤 大正 14/昭和 17 増築] 正法寺川南沢 第五号石堰堤、第六号石堰堤、第七号石堰堤、第八号石堰堤、第九号の一石堰堤 大正 15] 第十二号石堰堤、第十三号石堰堤、第十四号石堰堤 昭和 2] 正法寺川北沢下流鉄線蛇籠水制工 大正 14]	南沢第五～十四号の石堰堤は、正法寺川南沢の上流域にあり、大正 15 年度から昭和 2 年度まで、県が実施した正法寺川砂防工事第 2 期工事の一環として築かれた。基本的には谷積の重力式練積堰堤であるが、第八号は空積の重力式堰堤。規模は第五～九号が堤長 20m 前後、第十二～十四号が堤長 20～30m になる。堤体前面に水叩と護岸を設け、浜岸の安定に効果を発揮する。鉄線蛇籠水制工は、屈撓性に優れた蛇籠水制工の中で最も堅牢な鞍掛水制工。北沢第十六号石堰堤は堤長 48m の大規模な重力式練積堰堤。
石川県 金沢市	浅野川大橋詰火の見櫓 大正 13/昭和 46 改造]	市内に現存する最古の火の見櫓で、施工は市内の高田商会。三角形平面の鉄骨造で、柱や横材等は山形鋼を用い、筋違は鋼棒とし、一部にアーチを使う。
静岡県 小山町	森村橋 明治 39]	富士紡績小山工場と駅を結ぶ旧軌道用の橋梁。下路式、単径間の鋼製曲弦プラットトラス橋で、邦人が設計・製作した鋼製トラス橋としては、わが国初期の遺構。
滋賀県 近江八幡市	旧中川煉瓦製造所 ホフマン窯、事務所、機械場、縄縫工場 大正 5 頃]	ホフマン窯は長辺 55m の平面で高約 30m の煙突付の煉瓦造構造物で、全国的に貴重な施設。事務所は煉瓦造平屋建、装飾豊かな外観。機械場と縄縫工場は煉瓦造平屋建、コーニスにデンティルを廻す丁寧なつくり。
和歌山県 高野町	南海電気鉄道鋼索線高野山駅駅舎 昭和 3]	昭和初期洋風建築の意匠を基調とするが、屋根に宝形屋根の頂部に宝珠を載せるなど高野の地を意識した造形。

【登録有形文化財】8 月答申分)

所在地	名称 年代]	特徴
群馬県 桐生市	上毛電気鉄道 西桐生駅 駅舎 昭和 3] プラットホーム上屋 昭和 3]	駅舎は、中央改札場をマンサード屋根、東側待合室を寄棟屋根、後部事務室等を切妻屋根とし、正面車寄付の木造平屋建で、全体をモルタル塗とし窓周りに装飾を施す。プラットホーム上屋は木造で、駅舎の西側に隣接して建つ。
愛媛県 新居浜市	遠登志橋 明治 38/平成 4 改修]	坑水路兼道路橋として別子鉱山内に築かれた、わが国現存最古級の鋼製アーチ橋。アーチには I 型鋼を用い両端をピン支承で固定する。
沖縄県 北大東村	旧東洋製糖北大東出張所 大正 7 頃]	壁面を石灰岩の布積で築いた凹形平面の建築物で、玄関ポーチには RC 造の列柱を配する。事務所と売店を収容し、燐鉱事業の拠点となる。
沖縄県 竹富町	西棧橋 昭和 13] 伊古棧橋 昭和 10]	乱積された石灰岩の両側面にコンクリート壁を打ち、先端部分は幅員を広くとり斜路状につくる。島に最初に築かれた近代棧橋。 石造及びコンクリート造で、表面モルタル塗とし、先端部分には 4 本の係船柱を配する。島の漁業の近代化を支えた大規模構造物。

【登録有形文化財】11 月答申分)

所在地	名称 年代]	特徴
栃木県 足利市	今福浄水場ポンプ室 昭和 5] 緑町配水場水道山記念館（旧事務所）昭和 5/昭和 9 増築] 緑町配水場配水池 昭和 5/昭和 30 頃増築] 緑町配水場接合井 昭和 5] 緑町配水場水道計量室 昭和 5]	米元晋一指導のもと建設が進められた足利市創設水道施設。ポンプ室は、丸くおさめた出隅部分や窓形状等が特徴的で、正面を曲面状に張出し、柱頭部を幾何学的モチーフで飾る円柱を配するなどゼツェンオン風意匠も取り入れる。旧事務所は、玄関脇の事務室の背後に応接室や貴賓室を雁行形に配し、フランス瓦を用いたハーフェンバー風の木造平屋建で、幅約 60m、奥行約 27m の鉄筋コンクリート造構造物である配水池は、内部が 3 池に区切られ、軒蛇腹より上部に目地付のパラペットを立ち上げた水位計室と保守・点検入口棟を、東側にほぼ左右対称に配する。接合井は、浄水場ポンプ室より配水池へ送る水の中継する施設で、上屋は鉄筋コンクリート造、東側に塩素滅菌室を接続する。水道計量室は、鉄筋コンクリート造平屋建で、四隅に配した柱形と軒蛇腹を段状に迫り出すのが特徴的。
京都府 京都市	竹田火の見やぐら 大正 12/平成 17 曳家]	鉄骨造、総高 12m で、地上を含めて 6 段の台形平面を徐々に減縮させた構成とし、望楼部には宝形造の木造鉄板葺屋根を架ける。現存例が少ない鉄骨造の火の見櫓。

【登録有形文化財】 【1 月答申分 つづき】

所在地	名称 年代	特徴
和歌山県 打田町	小田井灌漑用水路木積川渡井 大正 3]	藩政時代に開削された大規模灌漑用水路を近代化したもので、紀ノ川にほぼ平行して築かれる。木積川渡井は、煉瓦造単アーチ橋の水路橋で、アーチは煉瓦 4 枚厚とし、スパンドレル中央には橋名等を陰刻した銘板を嵌め込み、側面頂部の水平帯にはデンティルと鋸歯飾りをあしらう丁寧なつくり。龍之渡井は、大規模な煉瓦造単アーチ橋で、煉瓦 7 枚厚のアーチを段状に迫り出したつくりで、スパンドレルを石積で築き、その上部にフランス積の煉瓦壁を立ち上げる。小庭谷川渡井は、石積の基部から煉瓦 4 枚厚のアーチを立ち上げ、スパンドレルはフランス積で築く最初期に竣工した構造物。中谷川水門は、サイホンの原理を利用し川の下に築かれる暗渠。
和歌山県 那賀町	小田井灌漑用水路龍之渡井 大正 8]	
和歌山県 かつらぎ町	小田井灌漑用水路小庭谷川渡井 明治 42]	
	小田井灌漑用水路中谷川水門 明治 45]	
岡山県 建部町	JR津山線 (旧中国鉄道)建部駅駅舎 明治 33]	桁行 7 間、梁行 3 間規模の、南北棟、切妻造、棧瓦葺の木造平屋建とした請願駅。
岡山県 久米南町	無垢橋 大正 9]	橋長 7. 3m、幅員 2. 6m の石造桁橋で、萬成石を用い、擬宝珠欄干を付ける。親柱に「石匠高松市太田與平」を刻む。
岡山県 美咲町	旧片上鉄道吉ヶ原駅駅舎 昭和 6]	桁行 9 間、梁行 2 間半、東西棟、切妻造、鉄板葺の木造平屋建て、急傾斜の切妻屋根を架けたとんがり屋根の旧駅舎。
広島県 尾道市	山波変電所 (旧広島電気尾道発電所) 大正 12]	厚 1 枚半、イギリス積の煉瓦造で、小屋組は鉄骨造フィントラスとした大規模火力発電所の関連施設。
鹿児島県 大口市	旧曾木発電所	本館は、発電機棟とそれに直交する事務棟からなり、上部を欠円アーチとした開口部を密に配し、妻には丸窓を設けコーニスを階段状につくる九州南部の大規模煉瓦建築として最初期のもの。ヘッドタンクは、切石積の構造物で、モルタル仕上げとした法面には、水圧鉄管を据えるための穴を 4 箇所設ける。
	本館 明治 42]	
	ヘッドタンク 明治 42]	
鹿児島県 隼人町	JR肥薩線嘉例川駅駅舎 明治 36]	桁行 16m、梁間 6m、切妻造、平入で、外壁は真壁と下見板張からなり、北側にはプラットフォーム上屋を付ける。東半に待合室、西半に事務室を配し、換気口等建設時の造作をよく残す。

地域のニュース

大阪府立狭山池博物館平成 17 年度特別展 近代滔々－琵琶湖 淀川 狭山池－を終えて

大阪府立狭山池博物館 有井 宏子

大阪府立狭山池博物館では、10 月 8 日(土)から 11 月 27 日(日)にかけて、特別展「近代滔々－琵琶湖・淀川・狭山池－」を開催した。当館は、開館以来 5 年間のテーマとして、日本における時代ごとの土木技術を紹介する特別展を開催してきた。今年度の特別展は、このテーマの最終回にあたり、近代西洋技術が導入された明治期の河川事業を取り上げた。

治水政策の最重要事業とされた淀川改修工事を中心に、お雇い外国人による近代技術の導入、舟運確保から水害防止へという目的の推移、明治中期から

の日本人技術者の活躍などを、水源の琵琶湖から大阪港まで、公文書や図面等でたどる構成とした。

展示に至る資料収集段階で遭遇したのは、土木関係資料の散逸と未整理の壁であった。京都府と大分県の公文書が重要文化財に指定されている現在、資料保存の重要性を広く周知する必要性を痛感した。

それでも、来館者の「ワンドや新淀川開鑿など、土木を身近に感じた」という声が励みになった。

なお、特別展図録は会期終了後も販売しています。お問い合わせは、072-367-8891 まで。

夕張炭鉱遺産サミット 主催 産業遺産を活かす地域活性化実行委員会)報告

近畿大学 岡田 昌彰

去る 11 月 5 日に北海道夕張市において「炭鉱遺産サミット 2005」が開催された。明治 12 年の幌内炭鉱開鉱以来、空知地域は昭和 30 年代まで日本を代表する産炭地域であったが、現在は 9 鉱の小規模な露天掘が現存するのみとなっている。空知支庁は炭鉱関連施設の文化的活用について検討段階にある。

今回のサミットでは、ドイツ・ルール IBA Emscher Park 構想の中核をなす Gelsenkirchen 市にてアートプログラム顧問を務める Christoph Brockhaus 氏 (Duisburg 市ヴィルヘルム・レームブ

ルック美術館館長)を迎え、空知地域 8 市町村の首長による国際円卓会議、夕張市炭鉱計画学生コンペ、市民ワークショップが開催されたほか、写真家・五島健太郎氏による炭鉱写真の展示も行われた。本事業の中心的存在である吉岡宏高氏 (札幌国際大学観光学部講師)をはじめ、当日参加した 250 名以上の一般市民や自治体関係者が炭鉱遺産の可能性を議論しその価値を共有できた意義はたいへん大きい。国内の産業遺産利活用における先導的な事業として、今後の継続的な展開を期待したい。

エッフェル橋の発見 : ベトナム ホーチミン市のモン橋 + α

日本大学理工学部社会交通工学科 伊東 孝

日経新聞の文化欄の記事「幻の『エッフェル橋』あった」(2005.9.28)を読まれた方も多いと思う。「興味深く読んだ」「写真は発見したエッフェルの橋を掲載の方がよかった」などのメールやコメントもいただいた。ここでは、紙面の都合で説明できなかったベトナムのエッフェル橋について紹介したい。

モン橋は、ホーチミン市のベンゲー運河(サイゴン川の支流)にかかる橋長 128m・幅員 6.2mの歩行者専用橋で、1882 年竣工(1894 年説もある)、扁平のスパンドレル・ブレースド・アーチ橋である。かつての名前をメッサージュリ橋と呼び、エッフェルが植民地で架設した橋として必ず写真入りで紹介される橋である。しかしいずれの文献も昔の写真に掲載しているだけで、現存することを確認したのは、今回がはじめてである。

橋の左岸側には、歩行者用の階段と車両用の長いスロープが川に平行して設置されている。右岸側は川面に面するように階段が回り込む。スロープはない。したがって車両は通れず(自転車などは階段を担げば可能)、ものすごく贅沢な歩行者専用橋になっている。私たちが取材したときは、子供たちの格好の風上げ場になっていた。しかしかつては車両の通れる道路橋であったことが、橋の対面の盛土の様子からわかる。また橋の橋台部には桁の受け部が残る。

階段部の高欄を、四角形状のバラストで飾る。特に左岸側の装飾は念入りに行われ、橋軸方向のアイストップの高欄には切妻屋根を持つ家型の高欄を設置し、両端はそれに合わせた角柱で飾る。橋台部は石積みで、下の道路側から見ると、橋軸方向にアーチ・リングが組まれている。現在、アーチ部はふさがれているが、かつては通路となって川面に行けたのではないかと想像する。

アーチ主桁は 6 本あり、3 本ワンセットで構成されている。古写真と比べると、橋灯は後付で、橋の様式にあわせてデザインされたと考えられる。

維持管理が行き届かないベトナムの橋が多い中、この橋だけは例外で、夜間にはライトアップもされているようだ。水面に近いアーチ端部は、傷みがきたのだろうか、コンクリートで被覆されている。

モン橋は、今年(2005 年)で 123 歳である。竣工年の 1882 年は、明治 15 年。わが国最初の鉄製アーチ橋は、明治 5 年の大阪の新聞橋、1 スパンで橋長 27m。またわが国最初の鋼製アーチ橋は、明治 31

年の東京の浅草橋。1 スパンで橋長 24.5m。モン橋の橋長 128m が、近代の東南アジアにおいていかに抜きん出ていたか、想像に難くない。

しかもモン橋は、創建年代から考えると、鋼ではなく錬鉄と考えられる。フランス・ロレーヌ地方ポンペイにあるデュボン製鉄所(エッフェル塔の鉄材を供給)で、錬鉄の脱リン化の実験をしたのが 1886 年(リンの混入した鉄はもろい)、翌年から鋼の製造ラインの建設をはじめ、鋼の本格的な製造に備えている(吉田盛一「エッフェル塔の鉄」『エッフェル塔 100 年のメッセージ<建築・ファッション・絵画>』)。1889 年完成のエッフェル塔も錬鉄でつくられている。1882 年竣工のモン橋は、錬鉄製と考えるのが妥当といえる。この橋も、ロン・ビエン橋と同様、エンジニアにとって世界的な遺産といえそうだ。

発行部数 300 万を誇る日経新聞の効果は絶大で、記事の掲載後、見ず知らずの方から有力な情報が寄せられた。そのうちの一つを紹介する。

それは、エッフェルの銘版のある橋を 5 年前にホーチミン市の近郊で見たという電話であった。その後、送られてきた写真を見て驚いた。なんとエッフェルがベトナムで最初に関わった構造物(1880 年、エッフェル 48 歳)として知られるタンアン橋なのだ。文献にも写真入りで掲載されることが多い。情報を寄せてくれた奥水久氏によると、新しい橋が脇につくられ、タンアン橋は歩行者・二輪車の専用橋として利用されているという。

文献で見た古い写真では大きさがいま一つわからなかったが、タンアン橋は 100m 級の橋のようだ。

来月(2006 年 1 月)、ベトナム行きを計画している。この成果については誌面を改めて報告したい。

(本調査は、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業などの助成金を受けました。)



モン橋(上流側) : モン橋は、門橋」の意味。いつ、なぜ、橋名が変わったのだろうか。

学会の動き

「第26回土木史研究発表会」の開催と講演用論文及び討議欄の募集

土木史研究委員会 委員長(伊東 孝・日本大学教授)では、来年度の第26回土木史研究発表会の開催にあたり、下記要領にて講演用論文を募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。なお過去の土木史研究発表会で未発表の論文について(土木史研究 論文集) Vol.26(2007年6月刊)への掲載を希望される場合は、まず「講演用論文」として第26回土木史研究発表会で発表する必要がありますので、ご注意ください。なお、討議欄も従来通り募集いたしますが、詳細は土木史研究委員会のホームページをご覧ください。

1 主催:土木学会 担当:土木史研究委員会

2 期日:【研究発表会】2006年7月7日(金)・8日(土) 【見学会】7月6日(休)

3 会場:足利工業大学

4 募集内容:

(1)論文テーマ:自由(時代、対象、範囲等、すべて自由)。

(2)論文頁数:12頁以内(1頁2550字、9ポイント25字×51行×2段組)。

(3)使用言語:日本語もしくは英語。

5 応募方法:

(1)講演申込方法:

A4判用紙に「第26回土木史研究発表会講演申込」と明記し、①題目(副題も可)、②発表者名(連名者名・所属)、③会員種別、④連絡先(電話番号、⑤和文要旨(200字程度)、⑥過去の発表経緯、⑦セッション分類(別記参照)を記述して、FAXまたは郵送にて申込み下さい。講演申込受付後、執筆要項等を送ります。

(2)講演申込締切期日:2006年2月10日(金)消印有効

(3)論文*原稿締切期日:2006年3月31日(金)消印有効

*論文は「土木史研究(講演集)Vol.26」(2006年6月刊)に掲載されます。

(4)論文掲載料:論文原稿提出時にお支払い下さい。4頁まで14000円、6頁まで21000円、8頁まで28000円、10頁まで40000円、12頁まで54000円(10頁以上は累進制を採用しております)。なお、著者負担でカラー印刷も受け付けます(1頁あたり5万円程度で実費清算します)。

(5)セッション分類:プログラム編成上のセッション分類のため、下記に示す講演希望セッションを二種分類で記入して下さい。なお、該当する分類がない場合は、キーワードを適宜ご記入下さい。

I分野:人物史、技術史、社会・経済史(制度史を含む)、土木史一般(考古、研究方法論等を含む)、事例報告、その他。

II分野:教育、測量、施工法、地域・都市、景観、交通(道路、鉄道等)、河川、海岸・港湾、衛生・上下水道、構造物(橋梁、トンネル、ダム等)、防災、エネルギー、農業(灌漑等)、保存工学・保存技術、修復・復元、土木遺産の評価方法、その他

詳細は後告土木史研究委員会のホームページ(<http://www.jsce.or.jp/committee/hisce/index.htm>)をご覧ください。

6 送付先および問合せ先:土木学会土木史研究編集小委員会 担当職員(橋本剛志)

〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目無番地、Tel.03-3355-3559 / FAX.03-5379-0125、E-Mail:hashimoto@jsce.or.jp)

第32回土木計画学研究発表会(秋大会)報告

12月3日から5日の三日間、宮崎大学、宮崎観光ホテルなどを会場に、第32回土木計画学研究発表会が開かれた。土木史関連では「土木史Ⅰ」、「土木史Ⅱ」の2セッションで計6本の論文が発表された。

特に学生の皆さんの発表が目立ち、景観法の活用を含めた文化的景観や文化財を核としたまちづくりなどにも話題が展開し、土木計画学における土木史の位置付けを問う活発な議論が行われた。また、伊東委員長から直々に、土木史が立脚すべき技術や研

究方法の確立についてもっと議論されるべきとの提案も頂いた。選奨土木遺産調査の成果である『日本の近代土木遺産』(土木学会)も改訂版が出版される。全国的な土木遺産の調査や保存・活用、その技術の確立など、土木史研究に課せられる課題はまだ多い。

今後も、広い視野を持った土木史研究が各分野の研究発表会で発表され、また土木史研究発表会でも他の専門分野を持つ研究者の方々に発表して頂き、積極的な交流を期待したい。(岐阜大学・田中尚人)

第1回景観・デザイン研究発表会報告

12月9日、10日の両日、日本大学駿河台キャンパスで、第1回景観・デザイン研究発表会が開催された。

基調講演は「景観工学40年の節目を迎えて」と題して、前土木史研究委員会委員長の中村良夫先生により行われた。土木分野における景観工学の基礎と発展を築いた第一人者の講演は興味深く、この先、実践的に景観・デザインを展開していく際の心構えなどが語られた。発表会では、歴史的景観や土木構造物デザインの歴史的側面を研究してこられた景観研究者の方々も多数、論文発表された。名所に景観

の規範を求める研究、景観の持つ歴史的価値やデザインにおける歴史性の継承に関する議論など、少なからず土木史研究に示唆を与える研究が散見された。

委員会としては土木史研究より後発であるが、ポスターセッションの導入や、実務者の方々の発表への配慮など、研究発表会の運営として見習うべき点も多い。今後とも、広い分野の研究者、実務者を抱えるなど共通点の多い両委員会の積極的な交流を図りつつ、それぞれの委員会の個性を活かした差別化も検討していきたいと思う。(岐阜大学・田中尚人)

I. K.ブルネル生誕200年記念コンファレンス

イギリス土木学会は2006年7月にI. K.ブルネル生誕200年記念コンファレンスを開催します。I. K.ブルネル(Isambard Kingdom Brunel)はビクトリア期の最も著名な土木技術者の一人であり、イギリスでは多くの人々にその名が知られています。詳細は<http://www.iceconferences.com/brunel/index.html> まで。

餘部鉄橋架け替えについて

餘部鉄橋架け替えに、ついに地元から疑問の声が挙がりはじめました。世の中の声を問う最後のチャンスかと思われます。皆様の声をお聞かせください。詳細は<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum/>まで。
(早稲田大学・佐々木葉)

土木史関連図書

書 名	著者 編者	発行所 発行日	定価 (税込)
地図の思想	長谷川孝治 編著	朝倉書店 2005年10月	¥3,045-
地図と政治、地図と宗教および地図と社会3章に渡り、地図の果たす役割について多面的な分析を行っている。			
名所空間の発見 地方の名所図録図会を読む	萩島哲 編著	九州大学出版会 2005年10月	¥2,415-
3次元CGを使って、名所図録図会に描かれた各所の景観構造の分析を行う。			
評伝 月光は大河に映えて 激動の昭和を生きた水の科学者 安藝皎一	高崎哲郎 著	鹿島出版会 2005年08月	¥2,310-
戦前土木名著100書に選定された名著「河相論」の著者・安藝皎一の歩んだ河川学者・技術者・人間としての足跡を辿る。			

(日本ランドデザイン 横松 宗治)

編集後記

予算の都合上、本ニュースレターの発刊が年3回から年2回に変わりました。PDF配信、ホームページからのダウンロード等の代替案も随分前から議論されてきました。しかし、フォーラム紙を発行することの意義、それを継続することの意義があるはず。紙版の保存性とWeb版の速報性、両者の長所を活かし、充実した情報を適切な媒体で皆様にお伝えしていく所存です。ぜひホームページも時々チェックしてみてください。Webの双方向性を活かした皆様からのタイムリーな情報提供もお待ちしております。(山田圭二郎)

土木史フォーラム No.30

監 修：土木学会土木史研究委員会
発 行：土木史フォーラム小委員会
代表者 五十畑 弘 (日本大学)
事務局：(株)オリエンタルコンサルタンツ 山田・伊豫屋
〒150-0036 東京都渋谷区南平台町16-28 グラスシティ渋谷
TEL.03-6311-7856(直通) FAX.03-6311-8025
Email: yamada-ki@oriconsul.co.jp
<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum/>
印 刷：(株)青孔社

CONTENTS

-PREFACE		
• The 10 th Anniversary Greeting of the Newsletter of CHSCE	ISOHATA Hiroshi	1
-FORUM		
• About What Historical Civil Engineering Heritages taught me	NAGATA Reiko	2
-NEWS		
• 2005 Admiration of Civil Engineering Heritage by JSCE	(JSCE)	3
-Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List	KITAGAWA Daijiro and ABE Takahiro	4
-LOCAL NEWS		
• Report on the Special Exhibition at Osaka Pref. Sayamaike Museum: “Majestic Flow of Modernization -Lake Biwa, Yodo River, and Sayamaike Pond-”	ARII Hiroko	5
• Report on 2005 Yuubari Summit on Coal Mine Heritage	OKADA Masaaki	5
-OVERSEAS NEWS		
• Eiffel's Bridge Found in Ho Chi Minh City, Vietnam	ITO Takashi	6
-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
• Call for papers of the 26 th Annual Meeting of CHSCE	(CHSCE)	7
• Report on the 32 nd Meeting of Infrastructure Planning Review	TANAKA Naoto	7
• Report on the 1 st Conference of Landscape and Design Review	TANAKA Naoto	7
-WHAT'S ON		
• Brunel Bicentenary Conference 2006: -How Engineers Change the World-		8
• About the Rebuilding of the Amarube Iron Bridge in Hyogo Pref.	SASAKI Yo	8
-BOOK GUIDE	YOKOMATSU Muneharu	8

土木史フォーラム小委員会 委員長：五十畑弘 幹事長：田中尚人

委員：阿部貴弘、伊豫屋紀子、神田恭太郎、原口征人、日野智、榊山清人、山田圭二郎、横松宗治 学会事務局：橋本剛志